

俳聖の心

風土に生きる

村上鬼城など 俳句でにぎわい

楽しいことやうれしいこと、人生で直面するつらく悲しい出来事もすべてが題材で、17文字で伝えられるのが俳句の醍醐味です。

利根沼田は江戸時代から俳句が盛んで、写生や写実を基にした詩風は今も残っています。群馬を代表する俳人村上鬼城は、県内各地の結社に影響を与え、金子刀水など沼田の門下生も、後に世間に名が知られ多くの功績を残しています。

丁寧な暮らし 俳句で心豊かに

俳句は、紙とペンがあれば思い立ったときに一人でもできる手軽さがあり、題材は日常にあふれています。例えば、すれ違う人たちの服装の変化や前日の夕飯の内容を振り返ったりと、日々の小さな出来事に意識を向けるだけで、いつもと少し違う世界が生まれます。俳句を詠む習慣ができてくると、言葉の意味や

語源などを調べたり、人の句をたくさん詠んで語彙や表現を増やしたりと、言葉の一つ一つに向き合う時間が増えます。併せて、エッセンスを一つも削らず、余計な情報も一切入れずに練り上げる訓練や技巧を磨くことも求められます。俳句を始めると20年、30年と長く続ける人が多いといわれるのは、小さな物事に丁寧に向き合う積み重ねによって、人生が豊かになると感じられることが理由の一つでもあるようです。

今世につながる芭蕉の句

松尾芭蕉の句は分かりやすく、言葉の広がりや深さから、静寂の中の自然美や人生観が心に響くといわれています。『おくのほそ道』で、石川県小松市の多太神社を訪れた芭蕉が、斎藤実盛のかぶとを見て偲び吟じた有名な句があります。

むざんやな

甲の下の 蟋蟀きりぎりす

松尾芭蕉を敬慕するといったことから全国各地に建てられた芭蕉句碑は、市内に15基点在し、選句の内容がその地に合致し今に息づいています。江戸時代前期に全国を旅した芭蕉が群馬を訪れた記録はありませんが、当時、沼田で俳句が盛んだったことがうかがえます。



武具塚の前で一句。赤とんぼが飛び始め、秋の情景を思い巡らせる（右から貝瀬さん、白井さん、真下さん）